

読影補助および撮影方法の提案に関する医師へのアンケート調査結果

岩手県立久慈病院 診療支援室 放射線技術科 ○佐藤 匠(Sato sho)

三角 和広

岩手県立中央病院 診療支援部 放射線技術科

武田 大樹 高橋 大輔 佐々木 幸雄

【目的】

平成22年に厚生労働省医政局長から発出された「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の促進について」により、診療放射線技師のさらなる役割として画像診断における読影補助と説明が明記され、岩手県立病院でも積極的に取り組んでいる。今回、私達が行っている読影補助や撮影方法の提案を医師がどのように思っているのかを知るとともに、今後の課題等を検討するため医師へアンケート調査を行った。

【方法】

岩手県立中央病院の全医師を対象に、2022年9月13日～10月4日まで救急センター内の2ヶ所および血管撮影室に掲示したGoogleフォームのQRコードからアンケートにご協力いただいた。アンケートは無記名式の自由参加とし、質問項目は医師歴および読影補助に関して4項目、撮影方法に関して3項目で、回答は「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階とした。読影補助に関しては、読影補助は必要か、異常所見の指摘により気づいた症例があったか、指摘したものは信頼で

きるのか、読影補助をこれからもお願いしたいのかとした。撮影方法に関しては、提案は必要か、造影検査に対する助言は必要か、などを質問事項とした。

【結果】

回答数は35件であった。Fig.1に医師歴別の回答結果を示す。救急で接する機会の多い1年目から2年目の回答が最も多く、ついで10年以上の医師からの回答が得られた。読影補助に関する結果をFig.2からFig.5に示す。読影補助が必要かについては、とてもそう思う、ややそう思うで、95%を超えており、指摘によって気づいた症例があるかについても、ややそう思うを含めて95%以上の割合を示した。読影補助は信用できるか、についても同様に、とてもそう思う、ややそう思う、で9割を超えているが、先の2つが、とてもそう思うが70%を超えているのに比べ、とてもそう思うが48.6%、ややそう思うが45.7%と、やや割れる結果となった。読影補助の活動の継続については、これからも続けて欲しいとの回答が、とてもそう思う、ややそう思うで、95%を超える結果となった。

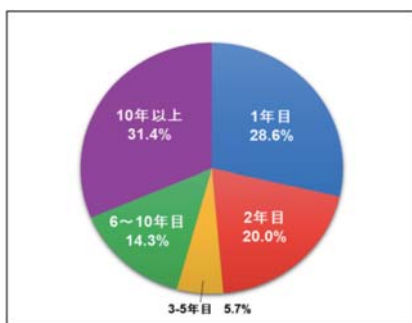


Fig.1 医師歴ごとの回答率

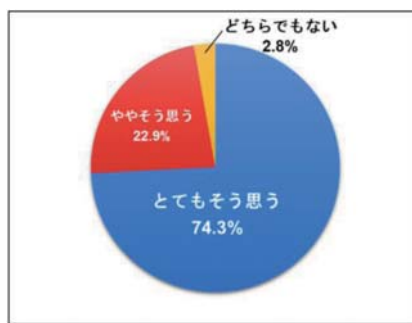


Fig.2 読影補助は必要である

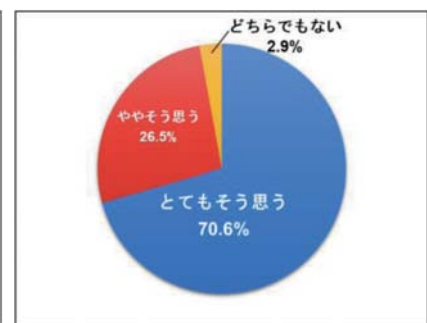


Fig.3 読影補助により
気付いた症例がある

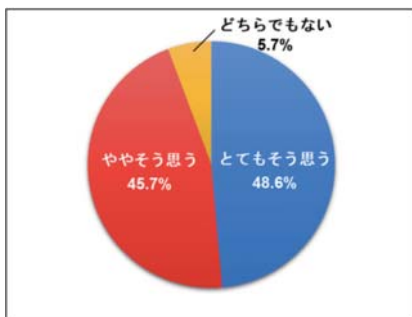


Fig.4 診療放射線技師の
読影補助は信頼できる

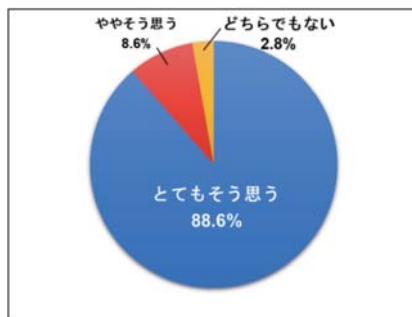


Fig.5 読影補助をこれからも
お願いしたい

Fig.2から Fig.5まで
・あまりそう思わない
・まったくそう思わない
回答なし

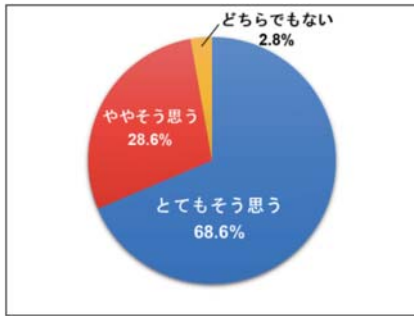


Fig.6 撮影方法についての提案は必要である

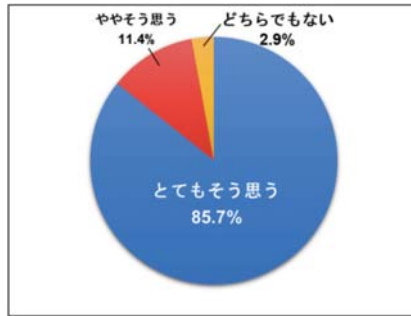


Fig.7 造影剤リスクのある患者への造影剤使用の相談は一助になる

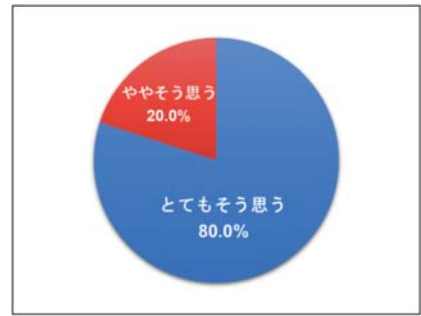


Fig.8 造影方法で悩んだ際に相談に乗って欲しい

Fig.6から Fig.8まで
 ・あまりそう思わない
 ・まったくそう思わない
 回答なし

撮影方法に関する結果を、Fig6からFig8に示す。撮影方法の提案が必要かについては、とてもそう思う、やややそう思うで95%を超える結果となった。造影剤リスクのある患者についての相談は、とてもそう思う、ややそう思うを含めて95%を超える結果となった。造影方法について相談に乗って欲しいかは、とてもそう思う、ややそう思うで全てを占めた。

【考察】

アンケート調査から、医師が診療放射線技師の読影補助や撮影方法の提案を強く必要としており、診療放射線技師の役割は重要性が高いことが示唆された。このことから、読影補助や撮影方法の提案は積極的に続けるべきであると思われる。読影補助の精度については把握し切れなかったが、その精度を高めていくために、定期的な院内で勉強会の開催や、各種学会や研究会に参加するなどの自己研鑽を心がけていく必要があると感じた。